

東京大学オルガン同好会

第 6 回  
駒場祭オルガン演奏会



平成 25 年 11 月 23 日      9:00 開演

## ごあいさつ

この度はお忙しい中お越し下さり、誠にありがとうございます。

今年も、キャンパスの銀杏並木が秋の風情を感じさせるこの美しい時節に、駒場祭演奏会を開催できますこと、心より嬉しく思っております。今年は昨年に続き多くの有望な弾き手が加わり、これまでにない賑やかな演奏会となりそうです。

広い講堂での朝早くの演奏会であるため、非常に寒いことが予想されます。また、演奏は合計約2時間と、かなり長い時間に及びます。そして、非常に恐縮ではございますが、時間がぎりぎりであるため、休憩時間も設けません。そこで、皆様方には、それぞれで適宜に休憩を取って下さいますようお願い申し上げます。こちらの都合で大変申し訳ございませんが、どうかご無理のないように、演奏会を楽しんで頂ければ幸いに存じます。

それでは、一同心を込めて演奏致しますので、どうぞお楽しみ下さい。

2013 年 11 月 23 日 出演者一同

### 表紙絵

Johann Georg von Bemmeler (1669-1723) „Bergige Landschaft mit trinkendem Vieh“

ヨハン・ゲオルク・フォン・ベンメル (1669-1723 ドイツ) 『水を飲む家畜のいる山の風景』

# プログラム

①

J. パッヘルベル Johann Pachelbel (1653-1706)

イエス、十字架につき給いしとき Da Jesus an dem Kreuze stund

J. S. バッハ Johann Sebastian Bach (1685-1750)

フーガト短調 Fuge g-Moll BWV 578 "Klein"

Organ: 黒宮 寛之 Kuromiya Hiroyuki

②

J. S. バッハ Johann Sebastian Bach

前奏曲 ロ短調 Präludium h-Moll BWV869

D. スカルラッティ Domenico Scarlatti (1685-1757)

ソナタ 変ホ長調 Sonata in E-flat Major K.370

Organ: 須古 泰志 Suko Yasushi

③

J. S. バッハ Johann Sebastian Bach

トッカータとフーガニ短調 Toccata und Fuge d-Moll BWV565

Organ: 工藤 哲朗 Kudô Tetsurô

④

F. クーブラン François Couperin

『修道院のためのミサ曲』より 第3番

Messe à l'usage des couvents Nr. 3 (Récit de Chromhorne 'Christe')

C. フランク César Frank (1822-1890)

『前奏曲、フーガと変奏曲』より 前奏曲 Prélude, Fugue et Variation, Op.18 – Prélude

Organ: 伊藤 はる菜 Itô Haruna

⑤

J. S. バッハ Johann Sebastian Bach

8つの小プレリュードとフーガ より 第3番 ホ短調

Acht Kleine Präludien und Fugen – III e-Moll BWV555

Organ: 杉山 慶 Sugiyama Kei

⑥

J. S. バッハ Johann Sebastian Bach

チェロ組曲 第1番ト長調 BWV1007 より 前奏曲 (Suite No.1 in G major – Prelude)

チェロ組曲 第2番ニ短調 BWV1008 より 前奏曲 (Suite No.2 in D minor – Prelude)

Organ: 後藤 大十 Gotô Daijû

⑦

F. クーブラン François Couperin (1668-1733)

教区のためのミサ曲より Dialogue sur les Trompettes

W. A. モーツァルト Wolfgang Amadeus Mozart (1756-1791)

自動オルガンのためのアンダンテ ヘ長調 K.616

Organ: 豊岡 啓人 Toyo'oka Hiroto

⑧

D. ブクステフーデ Dieterich Buxtehude (1637?-1707)

前奏曲ト短調 Präludium g-Moll BuxWV163

Organ: 中川 岳 Nakagawa Gaku

⑨

J. S. バッハ Johann Sebastian Bach

(コレッリの主題に基づく)フーガ ロ短調

Fuge h-Moll (über ein Thema von Corelli) BWV579

J. パッヘルベル Johann Pachelbel

3つのヴァイオリンと通奏低音のためのカノンとジグ ニ長調 より カノン

Kanon und Gigue D-Dur für drei Violinen und Basso Continuo – Kanon

Organ: 平澤 歩 Hirasawa Ayumu

⑩

C. J. スタンリー Charles John Stanley (1712-1786)

ボランタリー第3番 ニ短調 Voluntary III in D-Minor Op.7

L. ボエルマン Léon Boëllmann (1862-1897)

『ゴシック組曲』より 第2番「ゴシック風メヌエット」

"Suite Gothique" — Menuet Gothique (No.2)

Organ: 吉久 怜子 Yoshihisa Reiko

⑪

C. トゥルヌミール Charles Tournemire (1870-1939)

神秘のオルガン 復活節第2主日 より senza rigore

L'Orgue Mystique (2ème Dimanche après Pâques) – senza rigore -

W. ウォルトン Sir William Walton (1902-1983)

ヘンリィ五世 より ファルスタッフの死、やさしき唇に触れて別れなん

Henry V – Death of Falstaff, Touch her soft lips and part

Organ: 貝田 龍太 Kaida Ryûta

⑫

J. S. バッハ Johann Sebastian Bach

パッサカリアとフーガ ハ短調 Passacaglia und Fuga c-Moll BWV 582

Organ: 梁 正樹 Ryô Masaki

## 曲目紹介

### イエス、十字架につき給いしとき

あまり、聞いたことのない方もいらっしゃると思うのですが、僕がこの曲を知ったきっかけはとても単純でオルガン礼拝用曲集の最初のページに載っていたからです。



上がコラール部分なのですが、この曲では“Da Jesus an dem Keuze stund”の部分をフーガのように展開していきます。タイトルがタイトルだけに当たり前なのですが、やはりこのテーマは悲しみの感じをよく表していると思います。

少し冗長に感じるかもしれませんが、皆様に少しでも癒しを提供できれば幸いです。

### フーガト短調

小フーガの愛称で親しまれるいわずとした名曲です。学校で習ったという方も多いと思いますし、中には「ハゲの歌」として記憶していらっしゃる方もいるかもしれません。「あーなーたーの髪の毛ありますか」で始まる有名なパロディです。どちらにしてもフーガの主題はとてもわかり易く、一度聞いたら忘れない、印象的なメロディーだと思います。



このテーマが右手左手足鍵盤と繰り返し繰り返し弾かれることになります。

最後の小節の部分はつなぎの部分なのでいろいろ変わったりもするんですが、間奏部分を除いてほぼ休み無しで登場します。

以前横浜の演奏会でテンポを早めにしてこの曲を弾いたらミス連発でとても聞かせられるものではなくなってしまったので、今日はゆっくりめに弾いてみようかと思います。

ただゆっくり弾くのもそれはそれで難しくまた間違えてしまうかもしれませんが、できなかったところを責めるのではなくできたところを褒める褒めてのばす指導をどうかよろしくおねがいします。

### 黒宮寛之（教養学部文科2類2年）

1993年、愛知県名古屋市生まれ。小学校、中学、高校を卒業。現在に至る。

他に紹介することは…うーん、著作とか、っていつても何も書いてないしなぁと思う今日この頃です。

## 前奏曲 口短調（バッハ） ソナタ 変ホ長調（スカルラッティ）

音楽を鑑賞するとき、今から自分が聴く曲の成立の背景を前もって勉強しておくことはとても大事なことだと思います。しかし一方で、予備知識が全くない状態で出会った曲に一目惚れすることがあるのもまた事実です。僕自身、今回演奏するスカルラッティのソナタに出会ったときはこの曲について全く何も知りませんでした。にもかかわらず（いや、むしろそうだったからこそ）、初めて聴いたときに、この曲の驚きに満ちた世界が瞬時に目の前に姿を現しました。

以上の理由から、僕は今回自分が演奏する2曲についての解説はあえて何も書きません。演奏を聴き、これらの曲に興味を持たれた方はぜひ本やネットなどで調べてみてください。

ちなみに、僕は2曲目のスカルラッティのソナタを聴くと、木洩れ日がさしこむ原生林の中で一人の子どもが昼寝をし、夢を見ている情景が心に浮かびます。ただ1曲目のバッハの前奏曲については、自分の中でイメージが熟するまでまだまだ時間がかかりそうなので今は言葉にできません。

みなさんにはどのような世界が見えてきますか？ぜひ教えてください！

## 須古泰志（教養学部理科1類1年）

理科一類の一年生です。日々、一曲一曲に全身全霊で向き合っています。どうぞよろしくお願いします。

## トッカータとフーガニ短調

今回演奏するトッカータとフーガニ短調 BWV565 は最も有名なオルガン曲の一つであり、本来ならばどくどと能書きを垂れるのも憚られるところですが、やはり何も言わないのもすわりが悪いので少々解説を。

曲は大きく分けて冒頭のトッカータ、中間のフーガ、結尾のトッカータの3つの部分から成り、フーガの主題（・ラソラファミラレド#ラ〜）はトッカータ冒頭の音型（ラソラー・ソファミレド#レ）に由来しているものと思われます。全体の曲調は即興的で勢いに溢れ、若き日のバッハが心酔したディートリッヒ・ブクステフーデ（1637-1707）の作風を思わせるものになっています。ただ、この曲は長らくバッハが20歳前後で書いたものとされては来たものの、現在では偽作説、バッハの即興演奏を書き留めたものという説、元はヴァイオリン曲という説など正に諸説紛々といった状況です。

確かにかの大バッハの作品にしては稚拙・不自然に感じられる部分も無きにしもあらずですが、実際に演奏してみるとそれらを補って余りある魅力を持つ曲であると感じられます。個人的には、稚拙な部分については野心溢れる青年バッハの所謂「若気の至り」がそうさせたのではないかと（何の根拠もなしに）思っていますが、私がそう思うのも又、若さ故なのかも知れません。

## 工藤哲朗

今年も外部の者ながらこの駒場祭でのオルガン演奏の機会を得ました。このような機会を与えてくださったオルガン同好会の方々と、本日この演奏会にお運びくださったみなさまに感謝申し上げます。

今回演奏する曲は誰もが知っている曲であるだけに、演奏の際の緊張も一入となりそうですが、曲の魅力を少しでもお伝えできるよう、精一杯演奏しますのでどうぞよろしくお願いします。

### 『修道院のためのミサ曲』より 第3番 (クーブラン)

### 『前奏曲、フーガと変奏曲』より 前奏曲 (フランク)

最近練習中の曲から選んでみたところ、バロック期と19世紀のフランス曲が並ぶこととなりました。

一曲目はフランソワ・クーブラン(1668-1733)によるオルガン曲です。クーブラン一族は、とりわけバロック音楽の時代のフランス音楽界で最も影響力のあった楽師の一族で、フランソワはその中でも最も有名な一人です。パリ、サン・ジェルヴェ教会のオルガニストをつとめ、宮廷に入りして、特に晩年のルイ十四世を慰めるためたびたび御前演奏を行いました。

意外なことに、クーブランのオルガン作品で今に伝わるものは『2つのオルガン・ミサ曲』という曲集一つのみです。この曲集は『教区のためのミサ曲』と『修道院のためのミサ曲』に分かれており、前者が全体に華やかな印象であるのに対し、後者は修道院での演奏にふさわしい落ち着いた雰囲気曲が多くなっています。

二曲目の作曲者は、セザール＝オーギュスト＝ジャン＝ギヨーム＝ユベール・フランク(César-Auguste-Jean-Guillaume-Hubert Franck)という長い名前を持ち、ベルギー出身、フランスで活躍した作曲家・オルガニストです。リストやショパンにも才能を注目されましたが、ピアノ教師、教会オルガニストとしてつましい生活を送ったそうです。

今回演奏する『前奏曲、フーガと変奏曲』は『大オルガンのための6曲集』という曲集に収録されています。この曲集を出す前のフランクは、数年をかけて完成した歌劇が完全な失敗に終わり、極度のスランプに陥っていました。数年が経ち再び作曲の筆を取り始めたフランクの励みとなったのは、サント・クロチルド聖堂に設置されたばかりの最新鋭のパイプオルガンでした。フランクはやがて念願になってこの聖堂のオルガニストに任命され、このオルガンを念頭に置いて書かれた『6曲集』によってフランクはその華々しい才覚を顕にしました。

### 伊藤はる菜 (教養学部文科1類2年)

影響されやすい性格のため、バッハやパッヘルベルを聴いてはかっちりしたドイツの曲に憧れ、チャイコフスキーやラフマニノフを聴いては暗くて重々しいロシア曲こそ正義と心打ち震え、はたまたポール・マッカートニーの新曲を聴いてはビートルズサウンドに勝るものはないと涙するという、なかなか音楽的に軸の定まらない日々を送っております。ピアノを弾くにもオルガンを弾くにも曲選びに困る状態なのですが、昔からピアノでショパンやドビュッシーやラヴェルといった曲ばかり弾いてきたことを思い出し、とりあえず原点回帰を目指してフランス音楽を中心に練習することにしました。こうなるとフランス音楽の繊細な優雅さに美の極地を見出し始め、また軸がぶれてきています。



## 8つの小プレリュードとフーガ より 第3番 ホ短調

曲紹介のために調べてみたところ、実はこの曲は、ヨハン・ルートヴィヒ・クレプスという バッハの弟子の作品という説の方が有力なようです。（「それならそう書けばいいじゃないか」という声が飛んできそうですが……）

悪くいえば「偽作」ですが、高雅でなおかつあたたかく、それでいてどこか切ない、大変良い曲だと思います。

この「8つの小プレリュードとフーガ」には短い曲が多く、教会の礼拝で弾かれる機会も多いようです。

### 杉山慶（教養学部理科1類1年）

理科1類1年の杉山慶と申します。もともとピアノをやっていて、「パイプオルガン面白そうだしピアノ弾けるからできるだろう」と軽い気持ちで同好会に入りましたが、足鍵盤やストップでの音色の切り替え、奏法など、思っていたよりもずっと難しいです……ただ、オルガンの圧倒的な感じはいいですね！

そういえば自分はなぜか短調の曲が好きで、発表会などで弾く曲も短調がおおいような……皆さんに良い曲だなと思っていただけるよう今日は精一杯がんばります！

## チェロ組曲第1番ト短調 より 前奏曲

## チェロ組曲第2番ニ短調 より 前奏曲

「無伴奏チェロ組曲」は、J・S・バッハがチェロ独奏用に作曲した作品です。バッハの作品群は、「学術的で堅苦しい」と考えられていた時期があり、これもその一つでしたが、チェロの巨匠パブロ・カザルスがこの曲の価値を「再発見」し、彼の生涯を懸けた演奏活動の中でこの曲を甦らせました。おかげで今では「チェロの聖典」と呼ばれるまでの名曲として評価されているようです。今回演奏する第1番ト短調の前奏曲は分散和音から始まる、この曲集の中では最も有名な曲ですが、単音の列を飲み込んだ我々の頭の中で和音が再構成されて素晴らしい快感をもたらします。第2番ニ短調の前奏曲はゆっくりとしたテンポから始まりますが、だんだんと熱がこもってゆき、（チェロならば）吼えるように終わりを迎えます。今回はこの曲をオルガンで演奏してみます。僕の演奏はマズくても、曲自体が素敵なので聴いてください。

### 後藤大十（教養学部理科3類1年）

1年の後藤大十と申します。駒場祭1週間前に突然来て演奏させてくれと云った僕の生意気にも、やさしく応えてくれたオルガン同好会の懐の深さ！まずは、メンバーの皆さんに感謝申し上げます。

趣味を披露。或る曲が、ある演奏が良いものかどうかを見極めるのに一回聴いただけでは分からないので、僕はいつも、それを飽きるまで聴いてみる、ということをしします。（名付けて「食傷判定法」！）100回聴くまでいやにならなかったCDはホンノ数枚ですが、僕が高校生のとき、僕は「カザルスの「無伴奏」」を300周しました。いまでも聴いていますが、彼の演奏は非常に細部まで音の表情があって飽きません。

最後に、本日はお越しいただき本当にありがとうございます。

## 教区のためのミサ曲より Dialogue sur les Trompettes (クーブラン)

### 自動オルガンのためのアンダンテ ヘ長調 K. 616 (モーツァルト)

1 曲目はフランスの音楽家クーブラン(1668~1733)のミサ曲集から。鍵盤音楽全般で著名な作品を残しているクーブランは、サン・ジェルヴェ聖堂のオルガニストも務めていました。その初期に残したミサ曲集から今回の曲を選びましたが、どの曲も小曲ながらバッハやブクステフーデにはない不思議な魅力を持っています。

2 曲目はかの有名なモーツァルトが小遣い稼ぎに自動オルガン(オルゴールみたいなもの)のために作曲したもの。もともと人が弾くように作ったわけではないのですがピアノでも弾けると、単純に楽曲として美しいことから人気があり、モーツァルトのオルガン曲集などでは必ず入る曲です。

ペダル入りの曲では仕上げる時間が無いためこのような選曲になりましたが、ペダル無しでも奥深い音色が出せると伝われば、と思います。

#### 豊岡啓人 (法学部 4 年)

早いもので大学はこれで卒業となってしまいました、4 年の豊岡です。一応学部在学学生としては今年が最後なので気合いを入れたかったのですが、実はこのパンフ原稿を書いている時点ですら院試直前なのでほとんど練習できていません。最後一週間でゼロから仕上げるということになります。ということで本番中事故る確率大ですが、笑って見過ごしてください。

思えば2年生の時は、下級生が誰も入らなかったために9時間の練習の間ずっと自分一人しかないこともある等どうなることやら…と言う感じでした。しかし、去年今年と有望新人が数多く入り、今となってはオルガンが一台しかないのがもどかしいくらい盛況となっています。2 年続けて入ってくれたので安泰でしょう。

今回は企画段階から下級生陣主導の演奏会です。実力的にも立ち位置的にも今年はビデオ撮影など裏方に徹しようと思ったのですが、有り難いことに時間を割いてくれました。それに値する演奏ができるとは思えませんが、僕の演奏と下級生の演奏を比べて新人の有望ぶりを感じていただければ幸いです。

と本番コケたときの言い訳はこれくらいにして、せいぜい頑張ります。

### 前奏曲ト短調

Dieterich Buxtehude (1637?-1707) はデンマークに生まれ北ドイツで活躍した、当時の名オルガニスト、教会音楽家です。J. S. バッハの陰に隠れてしまった面がありますが、近年は録音や楽譜の出版も盛んに行われ、没後 300 年あまりたった今、人気を着実に増している作曲家の 1 人と言ってよいでしょう。彼の作品の特徴としては、本日の演奏曲でも聴かれるような自由なセクションの推移、大胆な和声進行、華麗な技巧をあげることができます。リューベックの町で 52 ものストップ(音栓)を備えた大規模なオルガンを駆使して披露された彼の演奏を聴くために、遠い町から訪れ、与えられた 4 週間の休暇を 4 倍近くも延ばして多くを学び取ったのは、他ならぬ Johann Sebastian Bach (1685-1750) でありました。

中川 岳 （教養学部文科3類2年）

曲の紹介は以上で終わりです。何と情報に乏しい紹介。

「しかし」と、これは言い訳ですが、この演奏会に関係した同好会内の諸々の連絡や取りまとめ、このパンフレットの編集等でなかなか忙しく、紹介を書くためにじっくり下調べをしたり考えたりする余裕はなかったのです。（上の解説は以前演奏会で同じ曲を弾かせて頂いたときの解説を転用したものです。）では、簡単に書けるようなもの、自己紹介でもするか。しかし、本日演奏する作品やその時代について詳しく書くのが難しいのと同様、自分について書くのもまた難しいことです。なぜなら、自己について他者に向けて書くためには、自己、即ち普段最も自分の近くにあるもの、自明すぎることを一度遠くに離し、言語化する作業が必要な訳ですから。

ここまで書いて一つ気づきました。「私のことを分かってほしい」というとき、それは私の理解する「私」を誰かに分かってほしいということの意味していないか。私が誰かに理解してほしいところの「私」は既に私に知られているといえないか。

AがBに対し「私はあなたのことを理解している」と言った。「あなたが理解しているところの私とはどんなもの？」とBが問う。それに対するAの答えに対して、Bは「そんなの私じゃない」と不満になったとしよう。ここに見え隠れするのは、やはり次のことだ。「ある他者が私を理解してくれた」と私が認識するのは、その理解内容が私による「私」の理解内容に通ずるとき、私によって知られた「私」に通ずるときだということ。

自分を理解すること、自分についてあれこれと思うこと、こういった作用を日常的に無意識のうちに私たちは行っているわけですが、この作用が消失する時間というものもまた存在します。私にとって音楽を演奏するというのは、まさにそうした時間の内に身を置くことであります。聴く人から見れば、弾く者である私（つまり、三重県から来たとある中川という男、大学2年生で哲学を中心に政治、社会等幅広く根本的に考察することに興味があるらしい…）についていろいろ思うことも可能でしょう。演奏を聴いて、演奏者について、あの人は情熱的な人だ、繊細な人だと評すること、これはごく普通に起きることです。しかし、突き放したような言い方になります。私としては、演奏している瞬間、そうした私の具体的なありようとそれに関する他者からの認識などどうでもよいのです。私は演奏している瞬間、自分のことなど完全に忘れ、ひたすら音楽に没入したいと思っていますし、聴いている人にとっても、演奏者である私のことなどはもはやどうでもよくなり、ただ演奏されるものにのみ没入せずにはいられないような演奏、こういった演奏を目指している次第です。

という、とある日の夜の思考のスケッチを以て自己紹介とさせていただきます。

### （コレッリの主題に基づく）フーガ ロ短調

跳躍してから一音ずつゆっくり降りてくる旋律と、八分音符を刻みながら徐々に昇っていく旋律とを組み合わせた二重フーガで、二つの主題が織り成す躍動感と力強さが魅力の小品です。

「コレッリの主題に基づく」という呼び名が付されている通り、この二重フーガは、アルカンジェロ・コレッリの作品（トリオ・ソナタ ロ短調 op.3-4 第二楽章。[譜例]を参照）に基づきます。この39小節から成るコレッリの曲に対し、バッハは構成を整えたり間奏を加えたりといった工夫を凝らし、100小節の作品に仕上げました。

コレッリの原曲は、主題を次々と繰り出し、勢いよくリズムカルに突き進んで、あっという間に収束します。旋律が非常に流麗で、弦楽の響きが大変美しいので、あまりに短くまとめられて

しまっていることが惜시られます(ただ、これが無駄を嫌う潔さというべきなのかもしれません)。

一方、バッハによってオルガン用に仕立て直されたこの曲は、盛り上がりと間奏とを何度も繰り返し、優れた旋律を何度も味わってから、徐々に終焉に近づいて行くという構成を取ります。終わりへ向かう気持ちの準備を十分にすることができ、より聴き手に親かな曲といえるでしょう。そして、クライマックスを終えたところで、最後に穏やかなアダージョを一小節だけ加え、先達コレッリに思いを馳せるかのように終息します。

バッハの作った曲の方が、一つの曲としては完成した構成を持っています。ただ、コレッリのは原曲は四曲から成る教会ソナタの第二楽章であり、バッハの編曲はオルガン向けの単品であるのですから、決して前者が後者に劣るということではなく、両者の性格の差異に過ぎません。つまり、前者はゆるやかなラルゴとアダージョの間に一瞬ハッとさせる躍動的なヴィヴァーチェを入れたのであり、後者はそれを単体の作品として整えたのです。それぞれ異なるコンセプトを持っており、いずれもそれをうまく実現した名曲といえましょう。

今年はちょうど、コレッリの死後 300 年に当たります。彼の生み出した旋律の美しさを、少しでも皆様にお伝えできるように演奏したく存じます。



### 3 つのヴァイオリンと通奏低音のためのカノンとジグ ニ長調 よりカノン

いわゆる「パッヘルベルのカノン」です。映画・ドラマ・CM などの BGM に頻繁に用いられており、また、クラシックにとどまらず、ジャズやポップスでも数多くのアレンジが演奏されています。大変多くの人に愛されている名曲です。

この曲の魅力は何なのでしょう。諸説ありそうですが、私は第一には「繰り返すこと」だと思います。まず、通奏低音が、同一の音型を繰り返します。四分音符で「D - A - H - Fis - G - D - G - A」を均等に並べ、それを 2 小節ごとに、28 回繰り返します。また、三声で旋律を奏でますが、実際にはどの声部も全く同じ旋律を弾くのであり、それを 2 小節ずつずらしているだけです。つまり、2 小節ごとに同じ旋律が繰り返し聴こえて来るのです。このように繰り返しが多いことによって、聴き手は自然と曲の流れを理解し、落ち着いてその流れに身を任せて聴くことができます。

繰り返しの重なり合いによって曲を無理なく進行・終始させるのには、技術が必要です。しかし、この曲はそれをひけらかさず、淡々と繰り返し続けます。このような嫌味の無さも、またこの曲が絶大な人気を誇る理由の一つなのかもしれません。

今回は、オルガン独奏用に編曲したものを弾きます。自分自身の技量に合わせて、多くの音符を削りました。その分、旋律と和音の伸びやかさを意識して、演奏いたします。

平澤歩

長らく大学院生をして参りましたが、今年の3月に満期退学しました。現在は、博士論文を執筆中で、もうそろそろ出口が見えて来たというところです（博士課程には、退学後に論文を提出しても学位を認定してもらえると、不思議な規則があります）。学位取得後の進路も決まり、来年からは新しいステージが始まります。

もう学生という年齢でもありませんが、いまだに駒場に遊びに来て、オルガンを弾かせてもらっています。週に一回、数十分しか練習しないので上達はしませんが、楽器を弾くのはとても楽しいものです。そして、演奏会に出演するのも、やはりとても楽しい。

コレッリの主題によるフーガは、実は大学院一年生の駒場祭で弾いた曲です。この思い出深い曲を、今回、退学一年生の駒場祭で演奏いたします。何年も経って、音楽への考え方も変わり、オルガンの弾き方も変わりました。書籍は読み返すごとに発見があると申しますが、楽曲も弾き返すごとに発見があります。これからも、この曲とは末永く仲良くして行こうと思います。

### ボランティア第3番 二短調

ボランティアとは、英国国教会の礼拝の際に演奏される一種のオルガン曲です。多声でしっとりとした前半部分と、跳ねるようにリズムカルな後半部分が織りなす動静のコントラストが印象的です。元々オルガンとチェンバロ用に書かれたものなので手鍵盤のみで演奏されますが、聞きごたえのある一曲です。

### 『ゴシック組曲』より 第2番「ゴシック風メヌエット」

高校時代に後輩が弾いていたもので、一目惚れならぬ一耳惚れした曲です。ゴシック組曲の中でも「メヌエット」と銘打たれているだけあり最も軽やかなものとなっています。掛け合いのように何度も現れる主題のメロディーにご注目下さい。

吉久 怜子

お茶の水女子大学から来ました吉久怜子と申します。紹介もなく飛び込んできた外部生が、このような演奏会に出られるとは夢のようです。同好会の皆様には感謝してもしきれません。

実は5年間部活としてオルガンを習っていた経験がありますが、周りのレベルの高さに改めて自分の未熟さを思い知らされました。初心にかえるつもりで、全力で演奏しますのでどうぞよろしくお願い致します。

### 神秘のオルガン 復活節第2主日 より senza rigore

### ヘンリィ五世 より ファルスタッフの死、やさしき唇に触れて別れなん

トウルヌミールの「神秘のオルガン」は51巻からなる巨大典礼曲集（全曲録音はCD12枚組になるそうです）。その名の通り神秘的な響きに覆われており、いわばカトリック版バッハと呼ぶべき作品となっています。今回はその中の1曲を演奏いたします。「ヘンリィ五世」はシェイクスピア戯曲を基にした映画で、百年戦争を舞台とします。第二次大戦下で制作され、愛国精神に満ち

た作品に仕上がっています。

音楽を担当したウィリアム・ウォルトンはエルガー以後のイギリスの国民的作曲家で、ジョージ6世とエリザベス2世の戴冠式のための行進曲を作曲しました。

「ファルスタッフの死」は新古典風のパッサカリア形式で、「やさしき唇に触れて別れなん」は印象派のタッチで描かれており、様々な時代の音楽を縦横無尽に取り入れたウォルトンの作風がよく現れています。今回演奏する楽譜は、オックスフォード大学出版から出ているオルガン曲集に収められています。

貝田龍太

会社勤めをしながらマイペースにオルガンを弾いています。

映画音楽家としてのウォルトンは現代のジョン・ウィリアムズに強い影響を与えました。映画音楽はカットや編集を免れませんが、そんな音楽にもパッサカリアやフーガといったオーバーテクノロジーをふんだんに用いるのがウォルトン流です。

トゥルヌミールの作品は今一番気に入っています。当時のフランスでは後世に残るオルガン曲が数多く生まれていますが、難技巧と圧倒的な音量で押していくタイプの曲が多い。無駄なく職人的で内面に重きを置くトゥルヌミールの作品はそれらとは一線を画しています。どこかで通好みの作曲家と称されていましたが、事実、噛むほど味の出るスルメタイプの作曲家ではないでしょうか。

## パッサカリアとフーガ ハ短調

パッサカリアとは、主に低音で反復される特定の旋律（オスティナート・バス）の上で様々な対位旋律や和音が展開されていく一種の変奏曲です。今回演奏するこのパッサカリアは、バッハのオルガン曲の中でも代表的な傑作として名高い作品で、彼が25歳前後の時に作曲されたものと推定されています。

まず冒頭でペダルにより主題が提示されます（譜例1）。この主題はフランスの作曲家A. レゾン（1650 頃-1719）の「パッサカリアによるトリオ」から最初の4小節を引用し、後半4小節をバッハが拡大したものです。



この主題の上に他の声部によって20の変奏が展開されますが、曲が進行するにつれてオスティナート・バスが次第に変形されてゆきます。特に後半冒頭の第11変奏では、主題がバスからソプラノに移動しアルトが装飾、第12変奏ではさらにバスが装飾するという、声部の立場が逆転した形式になります。バッハがパッサカリアの基本構造を壊した、曲の中でも意義のある箇所です。その後主題はアルトに移り、第15変奏で一声の上昇アルペジオになった後、再びバスに戻

ります。和音を積み上げる第16変奏、三連符の激しいパッセージによる第17変奏を経た後に、2声、3声、4声と次第に声部が塗り重ねられながら突き進み、重々しい和音の連続によって締めくくられます。

それに続く長大な第21変奏とも見做せるフーガでは、パッサカリアの主題は2つに分割され、前半は第1主題、後半は鼓動を打つような8分音符に変形された第2主題となり、二重フーガを構成しています（譜例2）。



さらに16分音符の華やかな対主題が絡み合い、フーガの主題と自由なエピソードが抑圧的な理性と高ぶる激情の間の葛藤のように互いを行き来していきます。終盤では、ソプラノが最後の主題をハ短調で謳い上げた後、ペダルによる16分音符の走句の上に和音が経過し、ナポリの六度と呼ばれる劇的な和音のフェルマータによって最高潮を迎えます（譜例3）。



その後、休止符によってそれまでであった世界が断ち切れ、崩れ落ちるようにハ長調に転調し、何かの境地に到達したかのように最後のアダージョで壮麗に終結する様は、圧倒的というよりほかありません。

楽譜全体を見渡してみると、それぞれの変奏や主題同士の上に様々な関係性、意図的な構成があるのに気付かされます。その巨大な建築物のような緻密な計算の上にながら、それでもなお聞くものの精神を揺さぶらずにはいられない、作曲者の想いが溢れて流れ込んでくるような旋律。僕にはこの音楽が、人間の何か奥深いところから沸き上がる感情を元に生み出されたように思えてならないのです。著名なバッハ演奏家である鈴木雅明氏も、「この曲と向かい合う人間の人生観を如実に反映してしまう希有な作品と言わざるを得ない。」と評しています。いずれにせよ、本当に素晴らしい音楽であることには間違いがありません。まだまだ拙い部分もありますが、精一杯演奏致しますので、少しでも心に残る物を感じて頂ければ幸いです。

#### 梁正樹（理学系研究科）

素粒子論研究室で研究員をしている梁 正樹と申します。バッハのオルガン曲は高校あたりから聞いていたのですが、大オルガンはおろか電子の楽器でさえ触れる機会すら持てず、僕にとってオルガンという楽器はずっと、手を伸ばしても届かないような遠い憧れでした。それでも2年前にようやくレッスンをしている教室に到達したのですが、最初にオルガンが弾けたときの感動は忘れられません。——ああ、僕は、ずっとこれを弾きたかったんだ。出逢うべき人に出逢った時のような、こみ上げるような感覚。ずっと聴き続けたパッサカリアを本物のオルガンで弾ける

機会が持てるのは、非常に嬉しい限りです。研究と練習を両立させるのはなかなか簡単ではないのですが、可能な限り続けていきたいと思います。

オルガン同好会では、駒場キャンパスのパイプオルガンに触れることができます。平日は概ね6時以降の練習なので、駒場の学生はオルガンを日常的に練習することができます。事前連絡は不要です。公式ホームページで練習時間をチェックして、お気軽にお越し下さい。

公式ホームページ:

[http://www.geocities.jp/organ\\_900/](http://www.geocities.jp/organ_900/) (「オルガン同好会」でGoogle 検索)

プログラム制作 中川岳 (教養学部2年)



